

## 曲 目 解 説

シベリウスは1865年にフィンランドのハメーンリンナで生まれた。父親はスウェーデン系の外科医だったが、シベリウスが2歳の時に亡くなっている。シベリウスは、5歳からピアノに親しみはじめ、作曲のまねごともしていたという。9歳から正規のレッスンにつくが、家族の強い要望もあって、大学は法学部に進んでいる。しかし、音楽への情熱は捨てがたいものがあって、並行してヘルシンキ音楽院の専科生となり、音楽理論や作曲法、ヴァイオリンを学んでいた。そして、音楽院でその才能を認められ、政府からの奨励金を受けて、初めはベルリンへ、2回目はウィーンへと留学することになる。

1892年、ウィーン留学から帰国したシベリウスは、本格的な音楽活動を始める。当時のフィンランドは、帝政ロシアの圧政下であり、国家の独立をめざして民族意識が高揚していた。そんな中であって、民族意識を前面に出したシベリウスの作風は、国民はもとより、フィンランド大公国の認めるところとなり、30歳代前半にして年金を送られることになった。放浪癖のあるシベリウスではあったが、経済的な基盤は、彼を作曲に専念させることになっていった。

1899年、フィンランド人の高揚した民族意識、祖国愛の象徴のような、かの交響詩「フィンランディア」が完成した。そしてまた、彼の初めての交響曲、今夜演奏する第1番ホ短調も、同じ1899年に完成しているのである。

後年の円熟した交響曲に比べると、この第1番は、やや生硬なところがあるのも事実である。しかし、随所に独特な魅力が輝いており、その管弦楽法とともに、シベリウスらしい音色、音楽に満ちている。

「チェコ組曲」は1879年3月4日から書き始められたが、その鉛筆書きのスケッチには「セレナーデ」と題されていた。弦楽のためのもの(Op.22)管楽器のためのもの(Op.44)につぐセレナーデとして計画されていたらしい。「小オーケストラのためのセレナーデ」というわけである。しかし、最終的には、「チェコ組曲」というタイトルで完成を見ている。

曲は、ドボルザークらしい旋律美にあふれ、チェコの民族舞踊のリズム(ポルカ、ソウセドスカ、フリアント)が取り入れられ、チェコの風土の清々しい雰囲気を感じられる。彼の名作「スラヴ舞曲」にも一脈通じるものがあると言えよう。楽器編成も一曲毎に異なり、ドボルザークらしい優しさ、温かさに満ちた佳品である。

《イタリアのハロルド》を完成したベルリオーズが、最も意欲を燃やして作曲したオペラ《ベンヴェヌート・チェルリーニ》は、波乱に富む生涯を送った16世紀イタリアの彫刻家を主人公にした作品だが、1838年9月10日にパリ・オペラ座で初演されたものの失敗に終わっている。その後、1843年に改訂する際、第2幕の前奏曲として作曲されたのが、この序曲「ローマの謝肉祭」であり、1844年2月3日にパリ音楽院で独立した演奏会用序曲として初演された。

この序曲のふたつの主題は、オペラの第1幕からとられており、激しいサルタレッコ舞曲のリズムによる主題は、ローマの謝肉祭の場面を描いた音楽からで、イングリッシュ・ホルンによる哀愁をおびた美しい主題は愛の二重唱の旋律である。このふたつの主題を交錯させて展開される音楽は、ベルリオーズの天才的な管弦楽法によってすばらしい効果をあげている。